

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

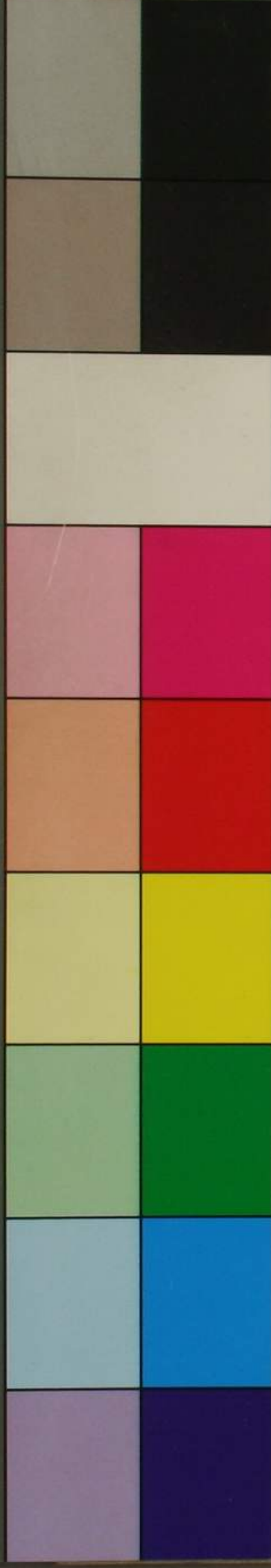
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



高きヲシクヤツワ
1281
5

此本に
一印所
断奉
願上
貴
亦も
一印所
断奉
願上
貴

細工

本兵

本兵

本

村田

代曩媛七變化物語卷之四

東都

振鷺亭主人 著



大權者畫七觀音
兼妙怨灵七變化

さ程左京を荒妙がめまほき臨終の悪相千代曩媛が例さくま非業の最
期彼といひ是といひ悼むとく形々中陰累七の道福ハさくたりの亡日の作善恭
兼その吊金銀はほろせ善端一義尽くて執行す然るふ建武十一年の春より
館ふちづく大怪ありつる夜遠は家の内ふ雨をうくと降きふたりとて来りて
と劇ぐうち舟を暴雨とより車軸とほほ條以てさる好くあく家鳴は辰動
殺しく石を研うと怪る雨志きりふ面と打衣と紋とが家の男女傘よ義とて朝つ
やくぬとふ立まよふ湛くよ言者外面は本出扱とバ蒼くする一天ふ雲すく月星いと

朗りの今環雨のしやと傍の人よ同びるまは同のふ一粒の雨のしやとらあを露も
 ひてるるとひととらり免角して雨止家の内と捨るふ一點の儂る所あり面と衣をぬる
 小一箇も濡るるのめはははは希代に珍なりより玉谷のこむり怪まどくは正
 當鼓の鹿と故うう韋都那うと行ふりの所存るじ扯捉らえざるものか
 あざり笑うかたりり左京とらふのくものさひ絶やうで禁じて春も閑池の杜若
 の咲ころあもりの左京徒然るるのぐらふ池殿の採は出まはやくも免かりるが元より
 長者の度あれ水石整ひ泉水遣水難くは清く戦々る杜若紫白ふまきく小
 鷲來の比翼とあづつ池の面ははははは感慨の情と信されむう鷲來雄と教
 さとーその人の夢を日さられむとひーそのかめと涙のまことむぐまの独れぞうと
 り歌と讀くさむぐと恨るるその人やうく菩提と発へ出家くるとや鷲來
 ハ誅小妹背の枕着ふらき會するうねといつても鷲來の想羽をく首と傾け祝

いさぐ一雙の鷲來とくくと此方の客も遊むる時亦も書と祝さばさあく左京の面
 とつとぐと打ちる看々此の變じく荒妙が面と化雄の正く我面も彷彿ううさて大怪
 あうらと床まうち執厩侯の箭とつらひ曳きなりて放つやまご雄のむまごび小村
 ほちうの鷲のふらう翅をうらけ甍とさうさ一啄と飛くまご左京七首とて拱て
 斬つけふ櫻せーが形ちいさく小豆の粒をふらうてまくと手の拵指より入るとと流
 くとくハ羽はとちり出さう左京真平ふまくと語り霊を託する小梅指より入るとと
 我精力軟して冥冥も犯さぬとつげよといひふをじてその夜より悪寒散栗一不と
 く大焚焼るがうく自行湧がてくあく腦れまも本目も死まも氷本を失く
 かく衣の袖を嘲羽も打ちかひあふ銀羽もく翅のさるまはま足なもよる水中
 泊るるがびとひあも小淋も鷲來の安女も似て此病症風寒暑濕は異るれば我殺るじ
 師も医業もあぐと各薬七を投てたう針灸茶の功も速転ハ陰陽師巫辨も

一七 景抄抄言

卷二四

二



大正...

...



荒妙が執念

鴛鴦子

著

怪と

...

...

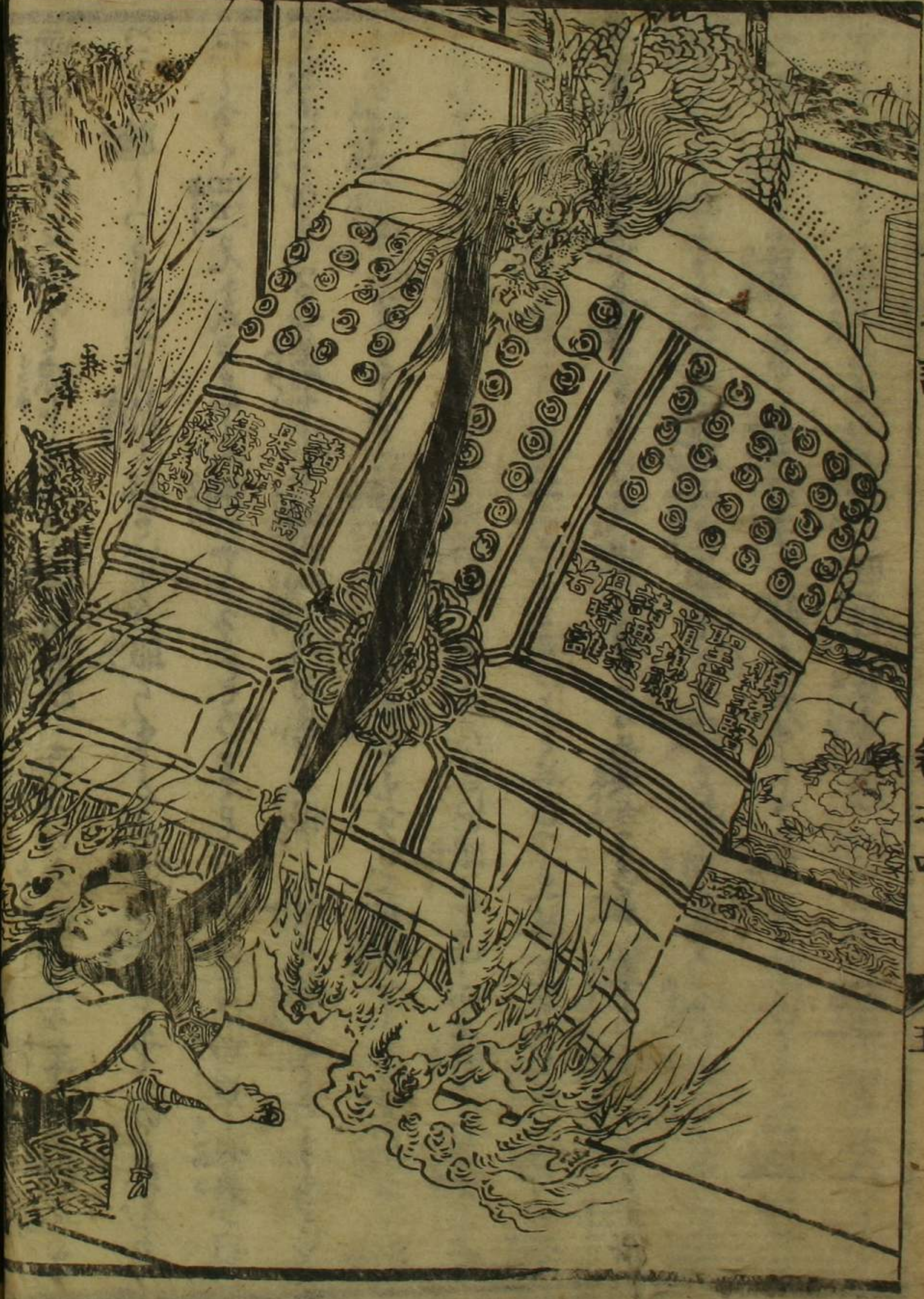
...

神仏の加持契とほめりか驗者の扱法室くその奇特なること訂く物怪事
 齋齋瘦日倍く類ふ階公今へとく如物の折も止るふさむりの霊来一時小醒
 急ゆるそ曉にされども晝夜幻をみる睡さる人車成女をさ小蜘蛛
 左京が頸小千筋の孫と禦けく喉とむく捲縮を苦めり家人等好く之を
 神吟らふ小鷲さ急ぎ蜘蛛の泉と排ふ又いつの間う巻つる車救回りか安
 ねふふあひま人等殺えんとく待役さる一隻の蜘蛛を見まらるやかく殺し
 八八の夏ありく胆の蜘蛛ふ異あるふむわくど但蜘蛛小殺種あり蟾蜍壁錢蟾
 子蠅虎鬼蜘蛛元伽音伽伽水蜘蛛等ありんへ花蜘蛛といふりのやくの性執
 此とぞさて此一隻と殺せり蜘蛛の出る車後へんといふるありく後ハ急
 とたらく殺せし掲げ日小弥坊り夜ハ尚殺千群出るうんくハ虫のじ借り
 燭と架四隅とぬけり千木拱と擗け蜘蛛の防をほつと日々夜々のるるれ

倦く睡もその隙小や蜘蛛千筋の繩とまといけ咽と擗くしる多
 き目見せバ蜘蛛と失く左京ハばさるがのいとみまら家人等案倦をくい
 本中と商議とるふいさる天魔鬼神うも挫ぐべき真平も殆りくの國
 と潛りく龜龜蚊龍と殺し山岳小走りく熊巖虎豹と搏車りく打物業
 せもせん風吹捕とまきのの奈行とも答さるくく會談區をふく夜ある且ハ左京と
 辛積の裡小入く息せりか時今矣發の刺あく左京蒸且く熬るがどくハ神焚く口中
 の湯はぼく私水気とさる辱小蓋と開くさびどふいづくよりハ蜘蛛を許
 むくりゆえより此辛積壞へる穴もく孫髪と入る透もさる小衫
 紛こむるりくく下より檢り蓋さく固あぐくく音もるをれ試小開く祝
 珠困るや辛積一面小綱と張く左京と千筋のいと後く小惚ふく染の行と流
 むくは急ぎ面水灌醒薬とくめく郷人ハ地けじうと家人等又詮る方も

うぐど是るりかて文月の半あをりぬ年々の春艸生のびく秋風ふかそよご
 張巻のうさうへて秋のあちと天橋よとや霊糸るらうあて荒妙が新灵儀乃盃
 棠盃金るるとバ灵柩の座とまうとて佛車を言々々々尾尾茶の枝もたさくお茶
 のいせ香のちのわるとえんまごお名香のくゆは供物ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
 羨野せさまごはくろこさて十三日の夜より灵鬼の来まもれごと飯汁序
 菜うづくそり言々々々そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
 の供物もろと炎とろりて失々ぞ怪々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 園雨へく怖く誰あつて近よる移る真平ひとりごとと愛む十四日の夜に二
 皆怖くつて至谷氏今宵もつて眠るまふまふとゆめへお灵柩の灯炉更なる
 ちさぶとすく渡るお又縮々々々々々つて真平例ふるらうらうらうらうと首と
 使るこまら此程の遠例は昼夜を言々々々さもことと暫時まごらほはははは

雨一通で降る風りと涼いきふ人々睡出ぬ既お子一ツの方側まご年おは婢女さ
 めめく臆つるめめめ怖くおいさご眠らごてあじが独りめめめめめめめ
 何となく四辺えまらさごと一お畑のうらうらとものこえぬれそのは白單衣着て髪
 と被色まびびとる女蕭々として櫛の側又つめ居る恨るおお熱々と打まもる
 どの婢女へ一縮とろり入りの膝下まら傍さともうさで突起せごさお幻うく鼻
 のこめらして夜を深々と更闇る此婢女がいんさは眠る中みも眠目覚えと者
 どのの女の傍の家より看病おつるのよとちひつて又おむらり真平の夜ご夢
 お魔光が曉近く森へるとくお水一さるお美女その声おおき亮掃子へ跳上
 畑のどくお抽出さ失らるる晨は良明そりてお鳥の囀るころ今自覚るるおの婢
 女斯と告るお夜鳥さう一亮掃子と祝るおおぎく同よういほてう人の抽出さ
 中らるはさくハ亡霊かうり此程の怪霊も生身の蜘蛛さうもお祟さくあじこと



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

卷之四

五

真平が勇敢な心で伺ふ隙やあるか些公の後で寝る間ふまへ形と現る
 のよと愈々をまのてはさる真平つとんとバ熱く睡て押搦と奮對もく元
 一人のてくきしが日開ぬるものづら眠るを起立かたつと驚き走出虚空を眠
 て立るがめり耻しや正体も我苟君の守守して冥冥に侵さる今於森あびし
 車の中あさよと悔つ大ふ時の面目と失つてささともを連日の分る且バ登
 の間ハ目睡てじと人とのゆふまを臥房入く懸んとせふ佐し哉局の内小洪
 ろる撞撞在る九人かち運びるともあもれとど長押の内入るさやもる方
 星もささりのや座席一面ありさふ言活は役こそまがじら天狗の爪若
 狐狸の飄掌ちやと後尻眼で駒車は看々此撞龍乃よりや一丈たりやあさ
 ん長き黒髪閃頻ふらぬり動るハ浮藻の波ささるごとく真平體は表々と巻
 けのく清の内よ髪をひた髪とけのけと踏志むとと細手なる勇士もあさく働き

中へくして鐘の岸破と覆被ぬきく鯨の吼るやあるやあめく你勇猛と特ごさ
 てははらんや髪髪と巻々と首の玉谷を擲えくまきくさる不浄の火とく猛火
 の中責もくあさつちやたかやと半足と同一身顛倒腦乱して若くといふ
 ありまの正末ありて有て一才を語らるも人々始て驚る此取言真平若き
 て喚もさるさるふいふやと走つておふ其二間の勢さ恰沸きる浴室ふとくく
 傍へ倚りて毛押のこるさより声々よ呼醒せ漸眼と関々も遍身汗の滴るさ
 浴びさくや面赫々と燃るふ似るるをとりて岡後僻地ささふの用は堪
 々さるば遺し真平もさ如此ありぬと敢て夜伽せんといふものく奴婢も
 下とぬきさるさる今とて譜代の家の子替をさるのこしるある夜所
 雨さるはるく電光間るさる今宵とあさく睡くとま合々さ大嫌焼殺十
 應丁の四隅と白晝のどく糞し辛積の側酒殺りけ勇しき物語をいじて夜半

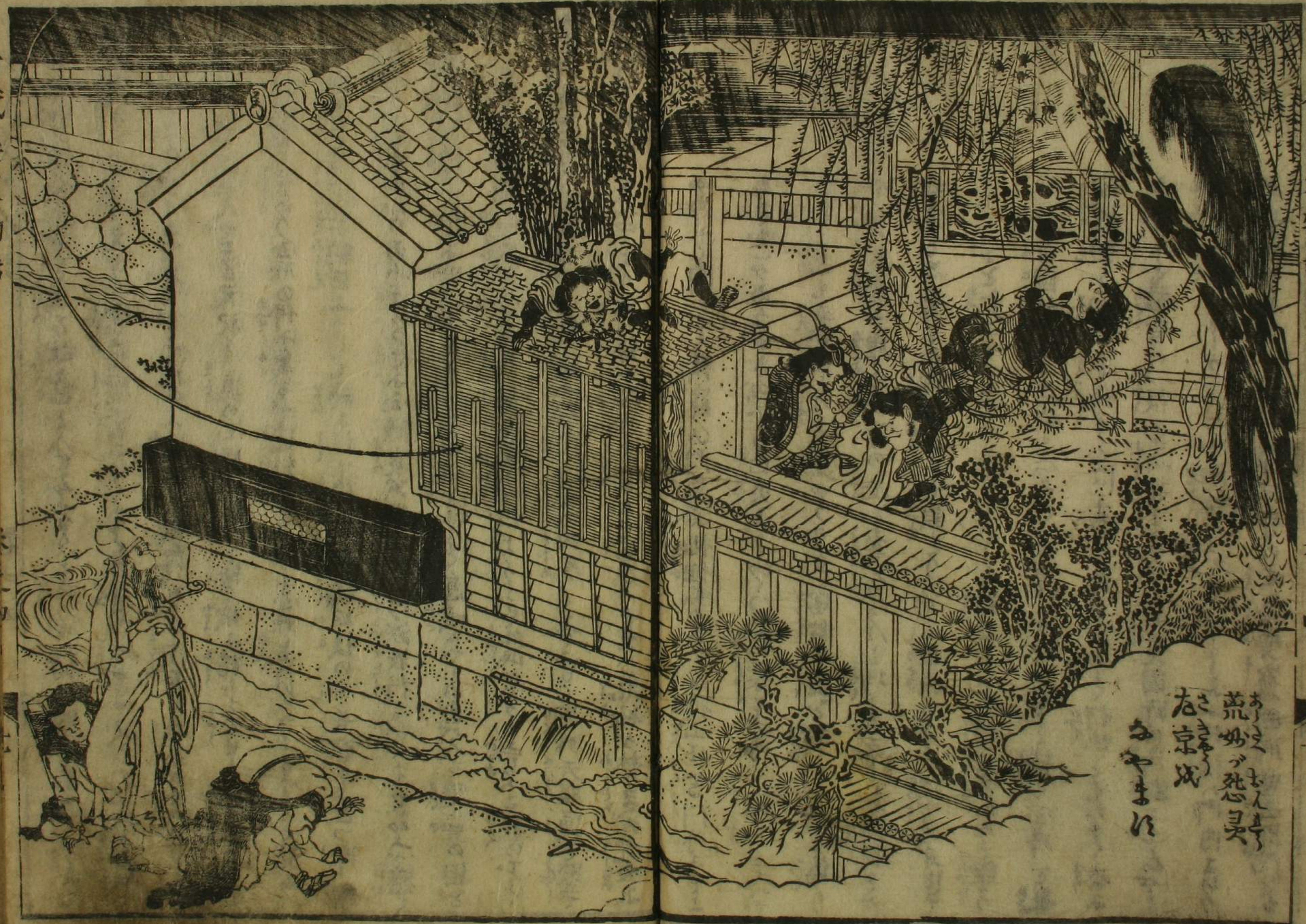
千代集女房言

卷之四

四

まへ慎守し更なるふあつひつとなく顔も眠萌せむふ千代採合牙と齧目と
 いふく今宵も一睡のみの贖出ささるるあどりゆくをとて守しふ又堪へ
 眠れどもさへいづれぞとく各々来引まんこ盃と巡り酒食と味もけも申入
 たりふ首を右に傾け左に揮く初なるは小棟然と背冷給り毛骨のよこち
 揃るが如くそんく各々肩く目さち行とやん怖く二所へ倚集る互は目と目と
 見合ども人の面長くう短くなり或は色赤くう青くう或はその姿さあて
 天井も低く又その容態ゆるゆるやうもえやほ面々色と失ひ口を開てあ
 るふ退くまやま風もささる小教本の大方うそく一舟は帆と清く黒闇にさるぬ
 傾哉と一塊とまりく鉢陀の宝号と称ゆる小虚空は喘濁る声あつていさや此鼓を
 りと我家るとばこそ来ける小思ゆる小優ゆる東の荒しよまらこちや今ふさつと
 引裂るらんさるりの狐真平と怒免皮肉よまら入しあのれ苦むと忍ぶる今

ちの中ふ念仏もあさようこまらういじ看よくといふあもさふ遠くうらう顔も
 かまはれく千とあがて頭と撫る小寂らうく刺さるる早く疔癒と失ふは吟を
 吟とよ声耳本あはれおろと霞ふ伏息とも做さぐわううたかくて夜の明を
 待こびぬらうち家の土まも鳴更等と算ふまらや曉の待の音もさるいなのめも明
 ゆく空とありぬまは面々うほく始く吻と息とほて人を地出し紙窓不のぐとあ
 るころる皆々遍身膏汗は紋と拭つ怖しは事ごと語合くさるる部遣りぬか
 して陽系瓜近上やと勇もち紙窓閑し小窓の前は女の生頸ありて覚る
 まご黄夜ふすやあつとよとりの面は鼻痕穿りのめやと响く仆らふのこは若を
 めはぶこのこも畏れを列し人ぞ我面を見よくといふふ其頸草々と大き
 輪のぞく眼様を内と照して差観けらくと笑ふは松をくも叔へ塊燈く燃入
 こそ荒ゆが亡霊の心変りうらさく旭日暉くやと小文換の者起出が驚く宿直の者を



あつてんま
 荒妙ッ死心ヲ
 左京成
 ちやまけ

一もふが邪宗あり事と聞き故意と入せりまうとさう多れ此時左京車ききて
 家の内彼をさう元より靈符壓當ふりくむくの費とさそまう入れば此本
 まさ山伏がむく嵐しあましと門外に返せり國師かくと聞き往來の官符とて
 家の長も通じ家入るるに元祝く眞の山伏も事を知り俄に請ふ参せし津衣も進
 らせりいと裏もさめり山伏の侍も眞も透りまひりまふ山伏主のりりるものを見
 小直橋本中将俊季朝臣さうも病に深て陥み落魄以後の辛苦想中きつ所檀
 の契満くぐで今めがりのみちるるに山伏哀に催さき泣涙修行あまそまふが應て
 招鬼の術と後しあふ四支冷々さる左京温とさう息噴くへりまふ人々隨喜の泪と
 殺すぬくく國師亡霊出入るる亮掃子方位よりさう如此せよと宣ふは教のどく
 木の内匠と雇て仕換るると今今いむさう窓の紀原とさう曾て國師天眼通と堅て
 中門の下に穿せし中より青絲と振出し棄させりるる荒妙が禁足の呪咀ふ

埋さる本業が青髪さうさうも荒妙七び形と変化して妄念と見えし中
 同百圓師問臥るる眞平が枕の障子に筆の七観音と画せり妙智力も憑るん
 日あぶ眞平平愈せり左京へはやく湯薬はきりつても幻もまふぬ枕乃上り
 結脚蹴坐し觀念くぞ坐さるる示しより竹の障子もあけりいと偏ふ各僧教化の
 敵うん誠ふ大徳と妖孽と銷すも揚もくくやんと人々其徳を仰ふ國師頭と揺るひ
 さうく荒妙が冤業燃やしていま譯も物區に前も信えんと宣ふ山國くさてもくいつ
 あり怨霊あるとへくさざると執念の深きや此入りのねと亡霊もまふ人唇と翻せり



小女 膳考 越安宅 期
 出色 大道 化三 國長

爰乎越前の國三國を過るる所あり坂井教の川字あり埠頭の港ありて倡家津と
 比く賑へて倡妓羣とさうく朗奇終るまふく声漢雲と過り韻水風ふ飄ふ却

説小女膳のゆる年出邑震平不敗とく此少色の廊は雲林遊園が傀儡と
 まりてめはしが面へ参入會く客入款付し公へ廻り申て母の敵と獲れりれとと
 立しと今樊善の中不頼く鳥の羽は且バ雲霞らひ野山とと人愁きく止時
 なうくくさく此遊園夫婦慳貪放逸せし欲うく幾万貫の財と積りれ
 とすべく慳とと知れど妻へ殊不其性悍く妓女苦楚不怠る夏めとバ慳く
 折檻と加へ過答く動も且バ血と流さふ到るささ人々悪く地獄餓鬼
 畜生のやうふりあへたされども小女膳賢くよく客と邀く懐くくは
 殊不姿色痴妻ありて儂く風流とバ遊園夫婦慈くくしてさすふ呵
 責と加へど家の名妓曙が小鬟とかくて此春を丈夫とぞささるるともひり
 ありふ不面愆とせり其故のやとまは遊園が妻めと貪りき取所縁あり
 会考あり時、あうく淺財と貪らふとてくもひりかふかの將けをさす

何とて此費を除てんと釘計と廻し毒害せんりのをとと女の態ありと
 てを考ふ娘とんと待りけりもが姉ハ七菜弟ハ又菜ふると思きりて同する此膳を
 突く大毒中マ姉弟一時ハ五體紫色小腫て七竅より血吐くや死とぞ
 いたる多遊園夫婦悲はさくおき怒り日比ハ十培とて與へける者家の内子
 あらめと上下の男女を責てしとて拷問をもふ一個の小鬟持不疑まききひく
 答掘りふ堪らぬ小女膳と不為ありとほあをまき小女膳と不念庫の裡縛り
 せし欲心盛られ年の殆れ客と休ぬる事以ありとてく家の者答はせとめ
 く客を邀んふ為門口の注連飾とて除く神柳の燈明とて輝く内の俵原へさす
 んせく妓女原不咽舞せりかく人の目欺き夜静とて後志のびゆふと散る
 ざり暖乎此日ゆるれ日や建武二年正月元日あり門の注連をア散る
 とは三個の櫃と併しが姉ハ七菜ゆる衣衫と打懸弟も又菜とてく瘡重あり

せし夜寝とちいさま櫃ふりし三葉ふりし。季子小麻の袴着せし目塞笠被
 らせ施主ふりし。哀れりし。門口集ひ看者あり。夜半に
 とぞ泣けり。親の手して二人まじり我見と毒害。日ごとく人元日早
 二個の櫃と送りし。例ごとく。遊閑夫婦怒り。魂を脱せし。心
 中とも怪しく。浅狭貪欲のよと。置る中。徒者あり。松飾と
 も。おどろき人。欺けり。簾下せる竹簾。忌中と。落書き。貶る。可
 可笑。夜明と。遊閑此落書き。大に憤り。家の者が。觸ると。管
 責。人日。初七日。あつり。ぬも。持佛。香花。も。只。客のみ。き
 と。あ。界七の。あ。卒。哭。日。近。く。又。季子。急。終。片。ふ
 て。俄。物。故。ぬ。遊。閑。夫。婦。も。今。ハ。あ。ひ。も。何。し。中。ん。常。の。公。発。り。遊。閑。子
 瓶。魔。弓。あ。どの。遺。る。か。記。念。う。く。是。と。て。夫。婦。哀。れ。り。わ。る。知。り

暮雲は向く回國の修行者あり。諸まきも。其の日立山禪定。濟の河原
 の地藏堂。越夜。あ。り。疲。れ。る。小。約。二。隻。け。り。来。り。人。の。言。信。と
 あり。我々。浮雲。童女。泡沫。童子。と。り。亡。者。も。あ。り。又。母。邪。見
 非道。の。人。と。毒。害。せ。し。と。我。子。報。ひ。姉。弟。を。非。業。を。死。々。を。り
 又。母。殺。つ。と。中。陰。の。道。善。も。當。り。香。花。水。を。手。向。ね。中。有。の。魂。さ。ま
 よ。い。畜。生。道。に。隨。て。形。の。あ。り。苦。め。り。あ。る。と。此。本。を。又。母。子。告。ぐ。供。佛。施。僧。を
 當。此。苦。患。と。脱。る。や。う。ふ。く。と。泪。を。い。せ。ふ。実。さ。る。本。あ。り。証。や。め。と。當。り
 小。衣。袴。の。と。り。出。又。母。の。是。あ。り。三。國。の。廓。雲。林。遊。閑。と。死。よ。相。あ
 へ。く。憑。つ。と。い。ひ。と。行。と。え。つ。か。失。ぬ。と。記。念。の。物。と。與。ふ。是。亡。散。り。瓶。甘。く。埋
 葬。の。の。あ。り。夫。婦。一。目。を。驚。令。更。不。位。阿。の。ひ。子。回。阿。ん。と。さ。ら。ぬ。あ。る。と
 又。引。と。む。ま。ど。し。修。行。者。と。な。ね。ん。ら。吊。る。り。と。い。は。く。報。謝。と。も。受

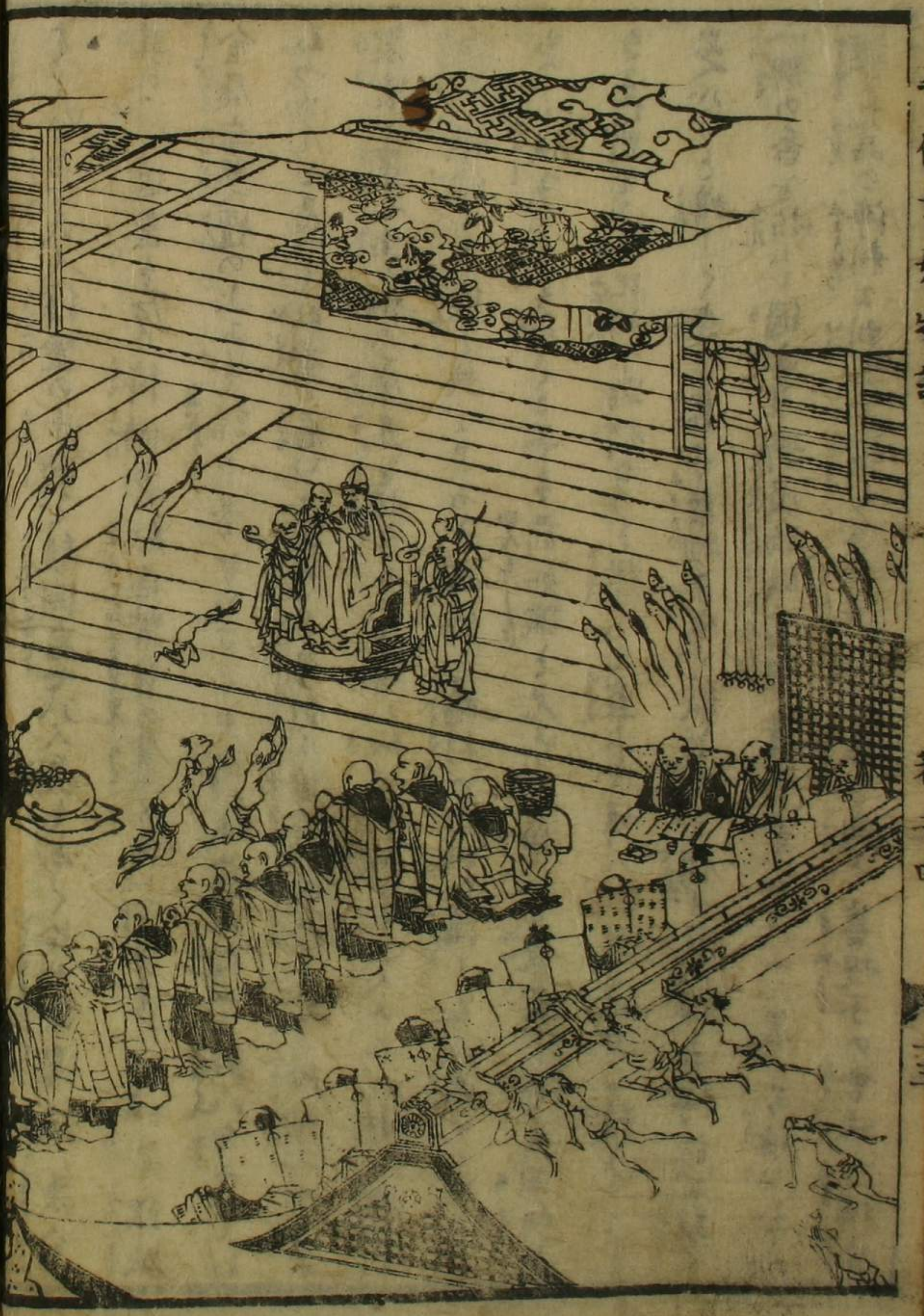
出て出さるぬさうしゆの不憚き遊用夫婦腸と断想しく忠前非歎悔しく一念
 發起し今迄いさうの善根とも事なく齊非時しくさうなる者憐れ善
 念不飄く大施行ともしめ追善供養のち方もあるしけり不遊用ある夜夢く
 らく三人の亡児幾許に餓鬼と一擁ふりて僧礼ある寺院に到る蒸物の紙元
 木に残まると貪らうとえしぞ佛様一妻も又思ひさ焚えり三人の思ふに
 檀子存くと併居く頼りの灰とよふ供物幾般も火とさうく燃つて湯と茶
 の滴と飲んともさば炎とある思ふに紙のぞく声とさうへく叫泣その悲
 さも母へさめと哭声の耳も入夢醒しくと佛乃けり離さどはさう人し流る
 しく夫婦言出つ泣く泣く泣あう此くも道德なき貴僧と近くあむ供
 養せなやと名ひわらうか爰不夢窓国師遊行しく日和山まぐ到らるる
 と同篤く形つて諸にさうみで國師遊用が亭も人あその儀清雜色先瓜

ろくひ白丁八人漆塗の衣與と早同宿七八人美々ろく拾曲象鼻高朱傘
 其外侯選堂々たり待儲め紅白紫黄の幕うち一間とまひ浄く銀燈
 金屏立双へ檀の上みで諸と参りせぬさく夫婦法則も何し一齡八旬あまの
 るつらんと見へく臥蚕の眉いとさうく秀致し輪金の帽子と冠と絳衾も香蕈の
 袈裟と單七宝の柄乃塵尾と持せよ夫婦ハ飯依偈御と三人の子双夾し情由と
 白地懺悔しく涙と共にさあぞ國師も輪衲の巾袖と濡し一む宿世の報せひ
 むつて供さうさきたる子も前知識とえく菩提心を發せりさうは回向ま
 きも亡児等が日比好る物竹うくと供よと宣ふ夫婦ハ餓くも亡児も終るること
 ぞくバソと嬉しく急ぎ菓子菓物さめく教と喝く偈も國師ま佛前小對く
 一辨の香と拈し過本義新灵物故某甲童男童女共み三界の苦悔と出く
 速く九品の淨利と到くと唱ふひく佛壇の扉を開く菩提子の念珠も操良

餓鬼等僧の
貪る物成



十代目長安坊の



千代目長安坊の

卷之四

志がくく坐せし我法力とめく供物とて都率の内院ふ婿も餓へて見
 小場りぬ仏檀とんよと宣ふ不思議の事と宣ふのうかととひつゝ夫
 麻と閑見るふ今近き供物も失く見くざりたりや奇特とん感
 涙肝は冷し直は夫婦とて一髪と擲斬房子とん事以てさあが
 國作善哉及心堅固速證善哉と唱させぬ涙は天下の善知識は価値
 奉る事遊閑夫婦類外の面目うと喜急は齊忌の珍膳美号善竭
 導師と款待もいゝと事斜もざりる却説小女膳は倉庫の裡は囚時々
 の教問もいゝ言もいゝと若くしふかの夢窓國師も應る金乃有
 かぎり搜し奪立の形勢不驚かその面をえぬは出邑震平より出邑は籠
 と赤咲く我夢窓國師と傳へ此家未つる蓄貨の金許多奪ひ且眉目
 よき遊女とん我妻ふ勾打ゆんととふるは你樓は案内せよ其形の

昔也とて物中らんる声は奉そと縛解ぬ出邑と母の歌とも知ぬ小女膳
 廊を出る気喜ひは快く承けし樓上は伴たる出邑叫びや我國師とめ
 素食して酒食はねのまき軍物を飽まに吃んる隈放の妙術をんよとて
 行廊と続るうまに看観するも誰咎る者もあらずこの局も燦爛とて
 佳哉珍味山端のあつ所とけは楽歌聲あはらるるの中あはる海
 其の賑しき気さるる物色めめんとて豪客の前は手と坐し飽まき小
 小表子等も知る老は又とこの局の敷敷置紙は小掩る菓物給る小と
 とり小敷帳のまもる顔に畳席と就る可矣又臺を奪とんとて操る
 の前ふけくへ行しそこく小逃出たる小女膳訝り何ゆ恐あふと問ふ此
 未はるが只月花を巻く仁義と忘る朋友不信あり恒の行跡よ
 の入るりつと云等の預れ人あり邪法行くそ他乃待るる地主親の金

後子費して衣次減し身を果て奴あるも便中しと處といひたりかくて又曙が局に入る
 ころとふちり顔の容進ま身贖せしやると誇りよま鼻樂と擡るは顔の遠
 せさく出色曙の面と鼻突のなとたろりか熟くとうかぬが是を梅上才一の美人の
 小腕のく小女膳がまを後く捕を下り奥の内へ推入しに難知る者ありたりさても
 比目の別とおしむらぬより曙が若目覚え其苦蕪する石築園房よりさうさうさ
 如何と疾はくさくも曙を批野射の所垂馬の尿尿を以紙せしやと自ら又ある
 者金錯囊失多と彼是は人々公はさて見えは夜將刀ありひハ小柄笄印巻已批
 みのの致しれもせしおのさもろなぬと劇ら盗竊りやめと金銭もさうさう
 等一人も見えはまきくハ夢窓園師の假的白候よりたれとく各々夢をいやく
 醒目燈をくつあゆみの車は笑もありはもかり肢の死もつらて己うさく血と
 掃くぬり遊園を許すれ金且曙小女膳をも奪と攻盜等公致く極々小款侍其

うあく夫婦急道ふとあり車呆子よ白痴よく言けく一般に唇必翻せり然るも
 遊園夫婦些も悔してことよさ善知識ありと安公決定くこまより信の念仏三昧
 とあり一向専修を行きまゝくのりされ日來血たれく識る者強盜却く教化と
 せしと讚歎し後の美譚にまるとやさるふと出色農平の妖術を以三國の廓瓜
 脱し枕山の原に到り茅萱驚りたる中ふ合の長積めあると聞くとさくくの衣裳蓋と
 入り出面々又あひくは形と換此長積へは是譚乃益汎収く旅積とえせくめくわさ
 まりさて曙を荒々きる曠原に未だ強盜等が若体は疵まじひ遊奪んとせせと色刀
 拱と見し曙曠より鬨まじく乾竹割み斬たふと血み塗る倒り小女膳を思ふと
 足も此も驚き却く大方あるを奉さくも公地やとりさば出色不審侍は
 中とふ小曙の音似ぬき眼ありて公地よくぞあてさくも君の情あり行竹の若思と
 脱安宅の関とも越るるさ嬉しくさうと言々さば出色殊感して小曙も膝軟く我

恨む仇と女丈夫よりさく園と越る女栗うりとくも我句引替る女等園と越る
 う狂々の説のてかひの長横の裡より穉衣脛中管の小笠と把出小女摺と質礼の
 ぞ拾せるとはたよ喜ひ一簇と越るゆゑ見答るる事りや有るんよ昔假一人園に到り
 賢らるる越へくとも謀とやゆもとらふとゆらそ仕裸アきやと別
 ここの志ゆくは小女膳頓智とゆゑはの生色と欺るるゆゑて安宅の園に到りて
 と詠ふと開夫一人も漏れと手ひき杖構へ待とる知るる法盗るる晒賈人獅子舞或は僧
 形のものは藤經山伏高野聖とゆひくさるる事と園と信つ越んとする小女膳
 のの糸のありと示せむ悉く漏れあり土色一人も知智なく郷々の疫神除る巫の歌にて
 猿田彦の面と被る通てく其面と足損る脱せりさく余考考訊ある其娘出邑夢
 空窓国師の衣と剥てより謀計とゆひつさ先遊園が檀越寺小攻盜戒名とて竟へ亡鬼
 墓と發くその衣とよりさく私眞の證とて修行者と假扮あり奴館の夜も人目よげさ

おもむゆるさせんが岩妻窓園作ら巧まると一任十振出るるくは賊徒とて首を刎
 て危木小断智より園吏城が金とえの概下飯一是則小女膳がえとさきよとば曲
 身金と贖ふとと判り又幾多れ草冠と捕えり半姑く園所は忠ありとて竟ふ
 極く園と通せるとは偏小女膳母の仇と撃べき孝を天の祐る所とる



左京 蹴立 嶺地獄
 花妙 隨血 盆池 獄

却説左京八病と申く愈へ千代最嬢母子らへ花妙が冥魂の冥暗と暗えん
 独り立山小禪定しるる日暮途かへ行く行かざる孤失の惘然として
 一と鳥一声の指と園とてや六道も餘得るよとあはれも公不に冥るよと
 逝中有の乃路東西女遊て園とて知る我独中有の様も其れも中し
 哀歎のよふわくも所不雲幕とじて一天小霞の雨頻とじて車軸のよきあふの

うらむと霹靂山を割くと怪しく懐くうれば左京恐くさきと方もつく足又信て走
 り大地怪しく振出山嵐喬木と吹折石と花し天地も霧なるあり尚行さき
 悪石峯石あり躑躅健しく九三里ありも毒し不稍雷静しくと又又回くべき
 の跡さう巧者級登の中不階で四方戻風以立圍たる地さ市され今ハオヤ
 飛く進退惟谷うれば不遠不竹やん吼る声固も其声人ふあくと黙はわく
 りの悲げふ又惨しく決せく近くもまに足とあ且二三丁の夜と不頭へ人ふ似く
 俤と牛馬のどくうれりの或ハ頭号歌あり或ハ又又眼異種美形の形ありの
 百群と吼唯くも眼の光中く人うられや俄鬼高生たさめとさく一驂不逃く
 とも燦とも又後へくと曳房さくやうと走りまらうと足ふの天秋ののの後より
 の形不随ふがどと襲ありオヤ其間まらまらうとけり先未竟空中不脱く
 息迫腿酸く襲と打坐れよと足さくは違る谷不隔く真下不随く後不
 下

犬の谷底ふしう肝消骨碎るを地うたふ竹地とも形く教方の人化泣叫く影く
 不そくとつりく蚊の集りて啼くどくたりのその声甚く悲しく肝ふら哀さ
 されども其形もあらまらうとあはれ中ふ此野凌越谷ふて教くうりもく人
 海うと叫ひほむ声のうらとあせありとこれと叫喚地獄とさくは左京ハ
 中へえ回ると風火の光えくふ力とゆるさあめくしく不向は思ま
 火の光此山のぬくらぬふ見も不足之幸しと山の頭不跡も足は金輪際より
 一株の大木ありて枝毎まらぬ草衣は懸くうらに許多の罪人と木不室より
 倒れ懸るがけにけり焰と吐血の法とあり岡苦く口くみり中地獄非地獄
 と自唱自責く泣く泣んと涙もあはれ焦む叫んとさくその声出と鐘
 喉と特々と縮るがけ骨髄より呻吟するその声あはれ苦さる形勢ありその
 どの罪人も見えけく左京が名と嘆めのあり言浪も不たうとく

一七 後 功 抄

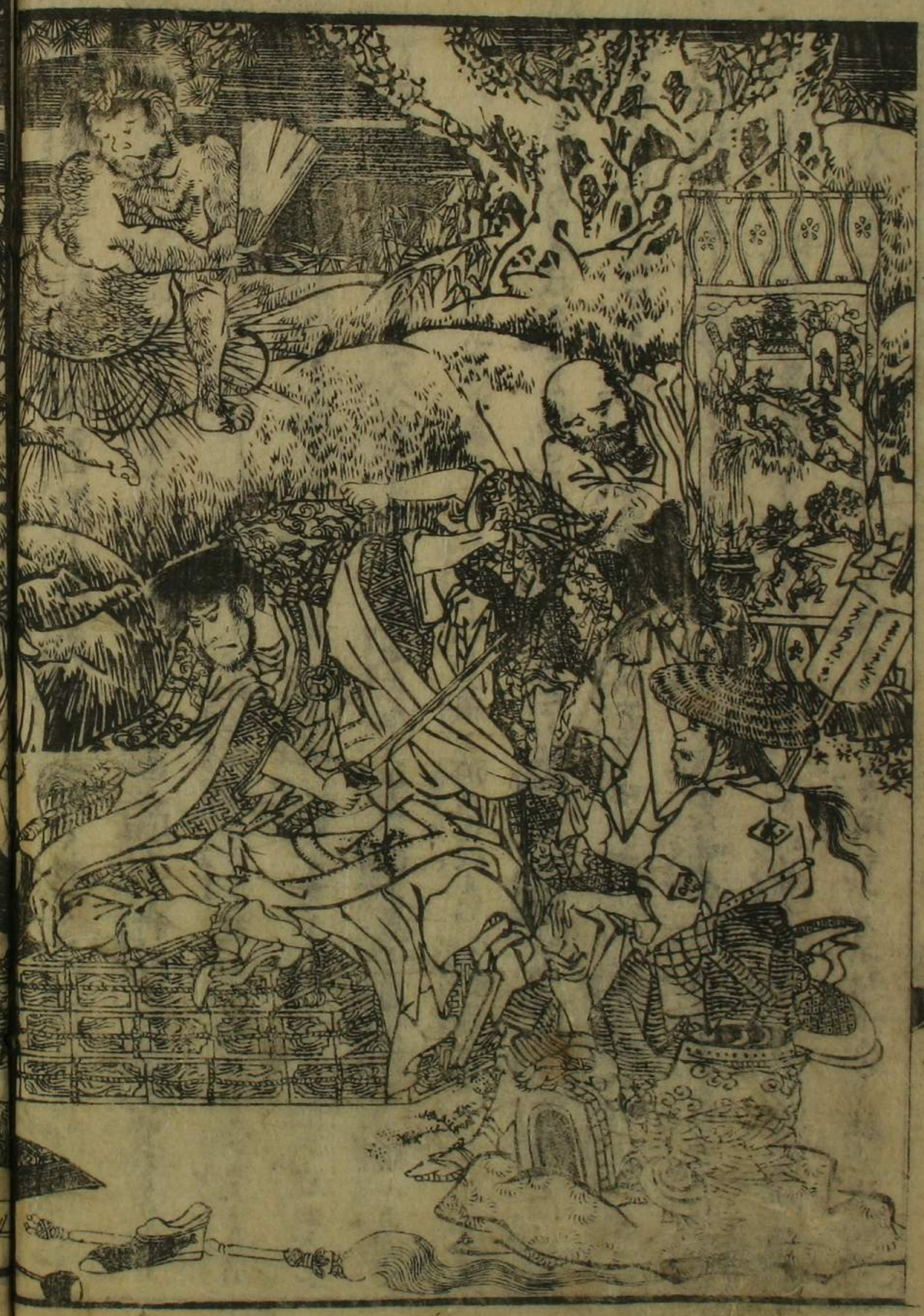
卷 之 四

下



出邑震
平夢窓
國師と傍
小女膽
強盜寺
秋とあ
関奴こゆ

一
二
三
四
五



千
仁
暴
妖
物
言

卷
之
四
三

少女のうぶやと何ふ幽ふ少女なりと昔つゆの罪業の若も新石に死して悔ふふ心
 めく加様不可責せらるるわくわく其方様の主役の所縁ありてせむく不便なる臨院の各
 佛十々此のありとも此苦患と宿むまへしとて大京を廻りて限なく不便なる臨院の各
 号孤秘んくともふつうふは出せんとくするうち罪人の口より出る炎燦々と燃ゆる
 大火聚とあり黒烟ふはまれとて形及ぶとてなりさて罪人の十代業と結つて五逆の
 罪人ありて回向と受ててさふらとて大京もさるもを流しとて急ぎ山と向て下りてありて
 辺の石悉く焼く火のどくさふ足の踏所もあつて又河原の流るの水沸き湯のどく足が焼る
 地もあつて幾瀬といふところの如く濟こせ又限なくとて野原や一つの火再々と追く向ある
 各回小返たりや嬉しくも行やともおとと憚つて其火又遙二里をりて先あり行の四
 くほどをさうり珠ふ今行泥共のりたわる処ふ忽然とてその火脚下より發しうわわ
 と發するふ又向より罪人と覺てて驚く逃る其形も色も眼くも牙も手も

わり丸尖り眩暈て咽削さる如くう僧あり俗あり男女のころちもあつて今燃ゆる火と
 見えより一齊小叫と哭出せり其火の空ふまき昇と見え下りて忽ち火の雨とあつて降る
 る罪人等火の鉄丸ふ打まぬより躡まぐ焼抽背の中へ腕ふねけ全身焼焦る蜂の巣の
 如くふるも然るふ入空二面の煙焰煽赫とて声風雷の響とは巨濤の寄るかゝりて逆
 まさころあぞ罪人等場まとい十方ふ馳回うち大地よりも又火烈々と燃ゆる地
 出る火が脱んと拉倒下ふとて上りんとて空より火の猛火雨とあつて又突
 倒下くと背をさうさうさうの火と地より出る火と一箇とあつて罪人等その中ふ
 けられ胸くくむまふ互に抱合つて叫び焼魚の伴相濡ふは四
 筆も竭がし大京恐りとえつる火も再々小返り罪人焼炭の如くあつて後
 打碎ぬ或もまき焦煙の下りて炎のれもあつてその中ふ其方様よ諸母あつて
 喉ののり近く倚てえるふ形は焼焦るその人ともえねどたふふ刀自が声あつてや


ちや血塗あつては々々下着媛の袖に緑のけさ行以らむかりふも毒の母と信
 てぞやふ媛けくくと芳ひかと櫻いふづう職まゝ此所を来つるまありむやさ
 千代叢媛を哀慕して是著の論廻りもど止らぬ我面と看よくとりて今まで
 のい一媛の面より荒妙が面と変じると左京愕然と驚きまゝんとする頸と捉ま
 煥業忍捨ぐく今阿鼻の地獄に墮て八千劫のほど大苦受自余の罪業無量
 ありゆふ苦受する事盡まりのそまゝいづう悪業の所作といひまゝ悲はたす
 ちまればとて鉄の拱とりて散るふ打拵左京打止る阿鼻喚叫のらるゝも
 是のいふでまゝとてとこれまゝとけや中と一声啼叫ありこそあま教使ありと云
 声恭あゝく聞たり

○ 地獄天堂の説儒士は不取衆生し末世へ不信死る南炎州不到がれ
 ばいまご其疑と譯とれば然ども諸経論に散在せり廣く佛經と

兜の其理と味々今此北越立嶺譚の怖りの獲えじとの假言鬼
 輩の真ありんぐり小作爲會するもの且バ惟獲夢物語と時見たり
 按ぐるふ血池の血盆経ふんぐり今も立山の血池とく水ありさ池あり又
 千池池といふ産のく一死る於女の若ふ血盆経と此池に納る供養は
 とう禪定の行人治し儂の何原乃事ふ世典ふんぐり儂汝陽の西園寺行
 原を異語してゆの二流よりうさぬれ河原と云慣るる此西園寺の軒
 尊へ惠をの作地蔵井ありて諸人いゝゝかゝるんれがなり
 ○ 抑越中國新川郡立山とや天武天皇大室三年ふあゝとて教典上
 人示現と夢の草創したまふ立山より此嶺の貌おつる佛殿とあり
 茲に孤独地獄とすハ築紫の雲善嶽南部の恐山信濃より遠く
 加賀の白山越の立山より此山に登るまゝ人等罪人等獄卒ふ責るる

罵詈雑言の聲聞くいと無用果の者も肝と鎖して信の
 起る主人も罪悪の受ある者も恐る登山とせむとや六十六部田
 の修行者誇りて冥府の苦報浄邦の樂果志清なりと見え思
 者もいと予が知所ふありて兒童婦女は革心必善因は難
 業ふ引と未亦地獄に墜見事以自ら誠て可慎可怖つとむし

村藤

千代景物語 卷之四 果六


千代景物語
 卷之四
 果六

未
 五月晦日



藏
△